

《原 著》

## 孤立性肺結節における $^{201}\text{Tl}$ -SPECT の診断能の再検討

生検，腫瘍マーカー検査との比較

長町 茂樹\*      陣之内正史\*      西井 龍一\*      二見 繁美\*  
田村 正三\*      松崎 泰憲\*\*      鬼塚 敏男\*\*      川井 恵一\*\*\*

要旨 孤立性肺結節を有する 125 例 (肺癌 87 例，良性結節 38 例) を対象に  $^{201}\text{Tl}$ -SPECT を施行し，肺癌鑑別診断能を，生検，腫瘍マーカーを組み合わせた場合と比較検討した。 $^{201}\text{Tl}$ -SPECT の診断能は sensitivity 76%，specificity 95%，positive predictive value (PPV) 97%，negative predictive value (NPV) 63% および accuracy 82% であった。これらの指標は生検の指標とほぼ同等 (73%，92%，96%，60%，79%) であった。腫瘍径が 2 cm 以下の場合，sensitivity は 38% と低下を示したが，specificity および PPV は 100% であった。腫瘍マーカーとの組み合わせでは，sensitivity は 85% に改善したが specificity と accuracy は各 55% と 76% に低下した。 $^{201}\text{Tl}$ -SPECT と生検の組み合わせでは sensitivity，NPV および accuracy はそれぞれ 84%，70%，85% に改善した。

孤立性肺結節の診断において  $^{201}\text{Tl}$ -SPECT 検査は PPV が高く生検陰性例における再検査の動機づけ，生検が困難な症例における質的診断法として有用である。しかし一部の腺癌で偽陰性があり NPV は概して低いため， $^{201}\text{Tl}$ -SPECT が陰性であっても注意深い経過観察が必要と思われた。

(核医学 38: 737-745, 2001)